



4424
1
14





4424
1

陽太
12月 8日
15日
頁 行
枝 稿原

見

カ
ワ
ト
ア
ト
マ
ス
カ
レ
ト

水は低きよ

明治文壇自己中心史

江見水蔭

記憶！それは幼年時代の事比較的鮮明
に遺つてゐる。無論自己を中心とする
有るが、それより出發して後には書物、
新聞、雑誌、書簡、日記、然るに記録
を参考して、能ふ限り確かな（か）之

No. _____

↑

昭和十年
五月十九日
講求

見

西郷隆盛が今に来る。南洲来！薩軍通過
 の声は岡山の中より高い。それは説明する。
 までもよく明治十年で、女時九歳の自分は昔
 校温知賢の岡山師範学校の附属小学校に通
 っていた。父無く兄無き身の復讐の不安全な関係で、学術は極めて
 西郷は必ず岡山を通るものと信じている。
 然うすれば我々も亦昔のやうな帯力が出る。
 やうになる。然うして考へ誰しも持つてゐ
 る。

昔ふがの(池田新下郎少将の建設した)

西郷隆盛
 帝
 都

明治十年の同十四年まで

A 10 20 青山三河屋書店製

露骨に明治文壇の状態を書き遺すべく
 企てた。自然それは他文士も冷淡に自己
 の忠実過ぎる結果は成らうけれど、後
 日何人の、文壇全体を旦つての記録作
 製の場合、参考の一ツには成らうであ
 る。これ以上の期待を以稿に嘱せられぬ
 事を豫め願つて置く。

No. 有る

見

草双紙を見るやうに成つて、昔より挿書

が拙劣で、ちやうど漢字活字の文章で埋められ

てゐるが、子供心に嫌馬がつかつた。

新聞は岡山市で山陽新報が早くから

発行されてゐるが、^{どの}家で購読するや

うは、大分距離が有つた。時々東京から来る新

聞では東京日々新聞が明朝活字、朝野新

聞が四號活字ふりて有つた。どちうも小説

説は無く、論説が主で有つた。

幼年時代の繪の好きさ自分では有つた。

A 10 20 青山 三河屋紙店製

祖父の狂歌を詠じてゐるで、その趣味も有つた
けれど、作る事は出来なかつた。自分で小説
家の成らうと考へは持たなかつた。

叔父達が軍人をしてゐるで、其氣を上京

したのが明治十四年^{の七月}で有つた。神田松枝町^{に出}

火^のが本所深川まで^{焼付}つた。大火の後で、

西国橋の一部が焦げれた儘で有つた。

本所練町の池田邸^{旧藩主}へあが登壇位が奉養する行儀

がふかつた時代に入つた。お父の家令と一

つゝ有つた。お父の家令と一
の氷原と云ふの

No.

見

叔父の家では 東京繪入新聞を取る
 ね。落合芳笑の繪葉書画が、小さく入る
 る。思ひふかひ。小説りく小説は無く、
 唯續き物といふので、題も単に、お何の
 話か。何の助の話か、そんな風
 見せで。
 ー豆ひ、今、今、鶏が鳴く、吾妻の空を後
 ろして旅路に出だし、二人の後の話は次
 記さんー
 こんど調子で讀者を釣つてゐる。無縁作者の

A 10 20 青山三河屋紙店製

署名が有つたのでは無かつたか、此種の續き
 物は古川魁藩子が元祖だといふ事を後で聞い
 た。(魁藩子は長く神戸又新日報に在社してゐ
 た。明治三十二年、自分は、神戸新聞
 の元祖は貴老で、
 然し、昔可成りし氣を微笑、
 して、深川の雀七の、
 自分の上京した時代は、有喜世新聞
 といふ半紙摺のが発行されてゐるやうな
 事柄を見て、
 新聞小説
 得意さうな、
 後上京
 間いれ、

No.

見

してゐる。 読書新聞は日小新聞が、これ
 う日誌無しで、小説も無く、^{おかし}書欄が既つ
 てゐる。 ~~市は他日小新聞~~
 が有らんか知るも、自分の目には入りあ
 せん。
~~か~~ ~~の~~ ~~都~~ ~~會~~ ~~化~~
 明治十四年同十五年
 神吉とよのま
 番町 温知塾と、有つて、一所は今日
 の士官学校と、幼年学校の豫備校と云つた格
 の有つた。 軍人志願の自分として一所は通ふ
 のが得策だと成つて、其頃 醫學部 大学に通つて
 る。 征兄の預けられて、富士見町 下宿屋
 に入つた。 神吉とよのまの素人
 初めて一所で雑誌を見た。 それは半紙摺の
 芳譚雑誌で、作者として永春江、假名垣
 魯文、高田藍白、^{柳亭種彦を名乗る}ふどの名を記す。 ^{三品隆漢}を得た。
^{田山寺間} 備前縣 筆乃命毛 といふ他田家の ^{筆力}
 を書いたのを、確の芳譚雑誌で見て、自分
 は祖父母の間いてる治政公の愛妻筆野

見

——因果は廻る小車の——
 ——たぐう有りとは白雪を踏んで行くある

——
 是れは南柯の一夢なりき——

然るに、その口調で、その處々、古人の
 金言宜しと云ふや、その説明や、漢文移
 しの比喩や形容や、その書に味するのを忘
 らふことなし。テの新し人達が外国語を挿入
 する如く、
 美人の形容さんか、殆ど誰か一致しや
 う。

No.

その狂詩を添えたりが有つたが、自分では少し
 難いので読まなかつた。これは腰郭撫松、三木愛花
 授書齋の類才新誌といふのり有つた。おどの名は能く
 見えた。

だが、自分は沖も授書齋の資格が無いので
 有る。
 未だ他は無籍有つたからか、自分は其時代
 には無かつた。有つたとしても然程多敷
 くは思ひなかつた。以時代の小説は、何処まで勸善懲惡を
 義で有つた。然るに其書より戯作の趣がめと
 云ふ風な作者自ら腰郭撫松と居た。

香山三河撫松宮殿

見

一年は二八か二九のどめ
水掃がなせし海堂の
一 次美落雁 咲花羞月

振り切つて用ゐるんね。馬琴、京傳、鐘島

の餘りが多量に残つてゐるんで有つた。

その文明開化といふ言葉が最早新らしく

用ゐられてゐる。

自分が富士見町を下宿した時代は、物價の

安かつた事は勿論で、銭湯八厘。蕎麦のたり

りかけ八厘。天麩羅蕎麦二銭五厘。で焼羊

一銭買ふと一人では食ふ切らぬ位。

A 10 20 青山三河屋書店

富士見軒の洋料理 定食が五拾銭で、それ

が高いと驚いた程で有つた。

九段から神樂坂まで行くのは、暗い裏

有つた。新橋の街燈は下町。小部。無く電燈は絶無。洋燈全盛時代

土曜から日曜へ掛けては必ず本所の叔父の家

へ帰つたが、その途中が例の柳原土手で、女

時代は神田川添ひの方は人家が無く、柳が植え

て有つた。柳原稲荷の附近には、傳授家や、

長花節(流)の此節と云つて有る。大きな金鏡

を堂々としたぶどが掛て有る。眼鏡の原

は

は赤い千ヨ、鬘の折れり仕けれ
 小使が大執
 訂費の大き紋の附
 びりで紺の法被一枚で
 ありて、けんかり可愛がもれて、江戸ッ子
 の意氣を少しく養得れ。
 届土見町より神田の表神保町の櫻田といふ
 下宿屋に轉じり頃より、自分分は、
 此の有つん。下宿屋の長男が同年配で有つ
 ら。侍、自分とは違つて勉強家で、けれど
 寄席が好きで有つん。自分は一人と一緒で能

No.

鼓の巻といふ阿呆院の講義が、
 出て来て、極端な癖、
 西国附近には、講義、
 寄席が揃つた上、半永久の小家樹で、
 日盛つてゐる。
 此の書屋を、
 所の叔母は江戸ッ子ぶりで、
 かいふ事、
 自分を見せて、
 は、昔の仲間部屋が、
 寄席と
 江戸ッ子

12見

三島中洲
川田慶江
さんどの学者と
文遊のあは

弱過ぎて問題に成る事。大違未だ現はらず。
 といふ時代で有つん。
 故郷なるん頃、芝居好きの自分、東京に
 入つて、何れも急進派その日印進。
 繪紙屋の前の立つて（へテの繪にガキ
 屋の並ぶ立つやうな）俳優の似顔繪を見る
 のうへ熱心で有つん。其上、似顔を畫くの
 が習字より多く成つん。（国周全盛時）
 芝居の真似、後者の假声、客席で「子ぶ
 る」て遊ぶので有つん。（模倣性も富んでるん）
 といふはイカン。東京に置いて、とんぶ者
 に成るの知れあは。
 叔父は池田家の家令の他、実業界も出
 てるんので、充分に自分の教育を監視する事
 が出来ぬ地、十五年の春、下野の板木の町へ
 亂刑？に書られる事、成つん。其時、は
 同縣人で片山重範（號猶存）の縣の書記官を勤め
 てるんので、その人は自分の七、八は多少、
 世話に成つん事も有り、森田節齋門下で
 舊學者でも有り、又其頃池田家の若殿が其
 下五位様ある人

No.

☆

三島中洲
20
青山三河屋紙店製

14見

女粗野ふりの整り、又東京と比べて寂寥ふの
、悲哀の念をさへ生ずるので有つん。
併し、近くは右平山脈。遠くは^{二荒}恩騷の
山脈ふど眺め、又武蔵野を繞いての平野の趣
き有るのを見ては、自然^美に対する感性が強
く成つん。
今の栃木小学校の有る処が元懸厩の所在地
で、女園園は一廓を成して、^{内部}官舎が
^多有つん。^{縣令}藤川某は他は住^らな^から^ない^が、
^{書記}官^舎は、^{官舎}の一番
廣ちふりの居つん。自分は女所に入つんので

A 10 20 青山三河屋紙店製

有つん。
玄園脚は書生が二人（いづれも自分より
年長者）園の一室は池田の苦験の所。女所は
自分はれを並べたので有つん。

No.

華族の苦験と一緒にあるの、^疎疎^な事
を^{（）}評^が無^かつ^ん。先生が懸厩へ出^{（）}出^{（）}
では^殊殊^勝る^{（）}向^{（）}を^{（）}有^{（）}る^{（）}が、^{（）}直^{（）}に^{（）}出^{（）}し
れ。わけは、女時代は治勲常談館が有る
でなく、町へ出ると^{（）}機^{（）}関^{（）}は^{（）}無^{（）}か^{（）}つ^{（）}ん。それ
は芝居の常席も暗きものは蓋を開け^{（）}勿^{（）}

見

詩田舎藝人の事で見るとは耐えあつた。け
 れども権夫人が東京子で、栃木の所の筆調が
 生憎と厭き地つてゐる。能く筆をふるはて
 行つたりした。(先生は仔細有る、一生書を持たふのつん)
 先生は又相撲好きで、相撲見物も寛
 大ぶりで、これより行つた。
 のうらぶが官舎中の子供を集めて、相撲を館
 内で取つて遊んだ。(官舎内の飢鬼古持り成つ
 れので有つた。
 東京

A 10 20 青山三河紙店製

これは丸山作樂といふ名が能く出てゐる。

つてゐる。それから、栃本新聞といふのが
 差入らされてゐる。
 権夫人は東京繪入新聞の愛護者で有つ
 たが、書生の一人、繪入自由新聞といふの
 を取つたが、忽ち人氣は北方に集中し
 た。
 第一は我等の警界で有つたのは、(芳年と芳
 宗との挿畫)なので有つた。奇抜な、放膽な、
 然るに今までのコマ的挿畫より、場を大
 きく取つた。

が新しうつた。

No.

見

續中絶の皆百のつれ。新篇嘯お虎

んてのが有つれ。作者は花笠文京(海老義)

方しのやうな記憶してゐる。そんな種のが續

き出ん。

其所で自分の其頃新うく出ん。繪入朝野

新聞の購讀する事。これには怪談

深閨屏とつれ。柳亭種彦(藍泉)の名で

出されてゐる。挿畫は彩川回松で、これは又

縁起不慮ふりや、^{一般}学けてゐる。以時代は神経病

といふ新ぶ病名を世人が覚えて、何んぞ少

A 10 20 青山三河屋紙店製

し怪しい事がある。ソレは神経病だと云つ

れのが有つれ。そので深閨屏と文字ッて、

神経のやうな怪談物を書いたのが有つれ。こ

れが^{大層}新うく^事のやうな^{大層}秋々は受取つて

るれ。^{大層}

其頃新聞廣告を^{大層}、矢張り^{大層}と

のが古書翻刻の古字賣を^{大層}。古書と云

つるも^{小説}で、それが又大割引

で人を釣つれ。(定価を高くして置いて、裏價

を安くするのやうな^大割引とは一種の^大詭術が

No.

17見

それではお初め一ツ
纏つたのは何程か
明石の汐風とくま
おん教養動風の
化猫退治で有る。

りれど、それより時代の者は引懸つた。
大層本を^{能く}買つて讀んだが、自分は栃木義
塾といふのに行き出したので、買本家を執
生りの細林さんで、これのどスツカリ買本家
通る成つた。
高井蘭山譯の日本水滸傳は最も強く刺戟を
受けて、自分を流刑の獅子頭林沖と比しおとし
^{人情本}水滸傳はばかりでも好かつたが、^だ為永一派の
手を出した。それ以上の性質の不良本
本まで借り出すやうな成つた。

然るして自分で小説を書いて見るやうな
成つた。素より纏つた物は出来やうが、おふく
馬語や種彦の摸倣を試みて、書き出したら破
り、書き出したら破つてある。
~~身帯~~ 観音堂を真似
して 如雷也物語といふのを、雲亭龍光作
蘇門芳鏡画といふものを、^挿画は無諦自分が筆
を執つたので、^{この初巻がけ違ひ}雲亭とは柳亭を崇拝し、龍光
とは自分の幼名が量太郎と云つて、^{云つて}目上の人か
ふは量公々々と呼ばれるので、^{それ}それを龍光

見

け時代の於て文学の何れを有るかを解しや
 うり無かつん。学者階級より一階低く知るる
 る献作者——それで結構にと考へてゐる。文
 士の權威を以て、そんな問題は天の賜と無
 かつん。唯只、好きふ小説を年中書いて暮ら
 す事が出来たら、それで満足がとくは極る考
 へるので有つん。
 けれど、そんな事を持出さうものなら、
 酔い目は吐きやせぬものか分り切つてゐるの
 で、内所で狐筆書いてゐる。

No.

と文字ツレのて（国）では話を（1000）とす
 ば讀むし蘇門苦話とは、大蘇門苦年と
 敬慕しぬので有つん。
 十六年の夏は、~~蘇門苦話~~ 蘇門苦話、脚氣の
 なる兒嶋へ轉じた。そのころ、^{讃岐の}金刀比羅参りを
 した。そのころ、~~蘇門苦話~~ 蘇門苦話の風を書いて、^{氣樂}
 道中、~~蘇門苦話~~ 喜んでふどるん。
 日、^{画工と}軍人の成るゝ氣を以て無く成つて、^{画工と}献
 作者、^{画工と}成つて立ちたい志望が、一杯の張切つて
 るん。

19 見

田中正造翁の末に鎌倉事件のズツと刻で若
 かつん。新井章吾といふ人は長髪で、その
 壮士を率ゐて、合戦場の原中で、大熊(大隈)
 退治の奇劇を演じのを見たり行つた。
 三島隆吉(三島)といふ美少年の給仕を官邸
 監獄事務局長
 は其後
 比較的
 官邸の歌首といふものか相次いだ。然るして
 其後は薩摩多羊で補充された。薩摩人の猛

No.

山山先生も職務が多忙で、残る縣下も自
 由民権の声が高く、藤川縣令が轉じて、其後
 有名が
 へ三島通庸が、福島縣と兼りて縣令として兼任
 して来たといふ折振ふりて、自分の教育
 人では有つたが) へえ其の故は主君の
 官舎の構内の一部を神社に譲り殿が有つて
 其所が假の縣令辦事堂(は完てらぬ)で、議員
 として田中正造、新井章吾、梅田三子、田村
 順之助、そんな連中が通行するのを見て居つ

威は今の人の連日想像の出来ぬ程で有る。
 康兒島韓の人間で有る。人間で無いや。
 思ひぬり有る。開業の悪念下ふ事。自分
 ぬち懸願籍問題に起る。然るに十
 年の暮(雪の降つた翌日) 栃木の
 宇都宮へと官吏一同人力車の六行列で乗る人
 の時、自分も其中にシヨボリ扱うて(書
 記官殿の従者格で)行つた。有る。栃木
 懸願官舎の小梁山泊は無惨あり、こので没
 落しぬので有る。

A 10 20 青山三河州紙店製

孤立しぬ不良兒

明治十六年末の同十八年まで

片山先生は書藝會非職と成つて、年末近く帰
 京する事な成つた。自分もそれな程、栃木
 縣下の二年を終つて、帰京する事な成つた。
 車の~~...~~成る~~...~~方法で、朝早く宇都宮を
 を出立して、~~...~~は千佳入つた。
 叔父は池田家の家令を辭して、村松町の轉
 任してゐる。(明治の序数數番動り、事件

No.

21見

け時代の新聞廣告
告す。賣薬は其の
少い。守田の山玉
丹、高木の清心丹及
び清輝湯、山田の
精琦水位で有る。

確かの考へりぬ。
 隣家が岩波長きとくふ薬家で能く壯眼
 水といふ目薬の廣告を新聞に出してあるを
 知つてゐる。
 此の如きもの娘の有り
 町内は 佐多村石先生發明、觀光燈と
 いふのを賣掛く店が有つる。洋燈七國論を
 唱へ、直輸入の文明を呪つる有名な佐多村
 石先生と傳とする。その發明品の洋燈

No.

か有つて、正直一圖の叔父が敵役と誤認されて、其の
 失意の極で有つる。
 其家は角の土築建二階家で、震災前まで原
 形で残留してゐる。世評の玄關脚は自分はず
 分存儀生活と成つる。
 父親の無い子は寧ろ悲慘だと、つくづく感
 じぬのは、其時代で有つる。(今更々そのしを
 思ふ。自分も悪かつたが、指導者其自身
 才を得たといふ事、どの位自分も禍
 りの知れぬで有つる。放任主義の教育は

A 10 20 青山三河屋紙店製

觀光燈を賣捌いてゐる人、停とすゝま足

りるが有つた。併し世は、星が来る

るのを一皮も自分は見つかつた。

村松町の突きり、郵便報知新聞

に。けれども叔父は世頃、新聞

事新報を讀んでゐた。

自分は幼年時代、母が福澤先生の世

界國畫し、口撥さるゝ、それを暗誦す

るのよ、泣かされたので有つた。その福澤諭吉

先生の新聞と、一種の可慕、味を以

A 10 20 青山三河城店製

て愛讀して

世は、自分は、枋木で讀みつけてゐるのを

繪入自由新聞を密に購讀してゐた。後

には叔父一家の者も面白いものとして讀む

と成つた。

自由燈を打つて出た。今、海

方、雑誌の類、それは岩崎、即ち、小説で

作者は、
確か、
小室、
山崎、
柳の、
作、
繪、
は、
昔、
年、
で、
有、
る、
。

有つた。水野、
方、
と、
神、
め、
て、
之、
を、
畫、
い、
た、
。

それで、繪入自由、
は、
昔、
の、
一、
人、
が、
成、
て、
。

23 見

小説の一筆庵可侯(富田一郎)が入社し
て日本銀次を書いて大当りである。
その~~少し~~後、~~少し~~同ド町内のついで五六軒目
今日新聞と書いていふのが出来て、この日
本に於ける夕刊の元祖と成つたが、早稲田文
学子野崎左文少科の~~記事~~記事がある。この日は假名
垣魯文が、高野長英著の語句を執筆してある。
併し自分は如何にふらふら魯文抄は如何にふら
つた。これに戯文的文章は好勝くして、小
説は何んかの理屈なく、つまり艶が無いや
うに感して、近所ふらふら録り社頭指す新聞
さへも立讀うは行かぬ。
これより後の出紙では有つたが、東京輿論
新聞? といふのと、日本タイムスといふ
のが現けられたが、いふやうに短命で有つた。前
者は各社の論説を~~集めて~~集めて見せるのが特色で、
論説流行の當時には、非常に歡迎されたのが、
恐らく各社から苦情が来たのが、~~廃刊~~廃刊した。
後者は桃色紙で摺って、副刊紙では清親の筆
で、鯛と娘とを挿畫して有つた。タイムス

No.

A 10 20 青山 三河屋紙店製

といふ海落ふりがある。こゝろは紙腔琴を
 發明した戸田 ~~堂~~ ^{欣堂} とのいふ人の小説がある
 やうな記憶がある。
 薬研堀の露次の中は、梅素薫とくは標札の
 出てくるのを見て、こゝろは能く芝居の引幕の
 繪摸様の署名してあるので、何んかの世人を
 訪問して見たいやうな氣持がした。で有りふ
 かつ、近所の新聞社へ駈込んで、^{記者の}弟子入りで成
 るうといふ程の勇氣は持たされた。然るに
 て相違も下小説本を買つては讀んで耽つてゐる。
 和合人山と。ハ笑人山と。七偏人山と
 か。然るに滑稽物（江戸っ子の遊戯的生活
 描写）を讀んでは、^{活版分冊配布の}村松町で有つた。自分
 は最も多くの刺戟を與へた小説はと問はれる
 と、^{能樂者小説と、}それより、^{依川小説} 橋本で讀ん
 だ。水滸傳 ^の 依川小説 ^と 有つた。（この二極端の思想
 が常に自分には交叉流を成してゐる、性格は
^{絶えず} 絶えず撞着を先てゐるのを、自分
 自身が認めあつたやうな感じがした。併し此二
 重性格こそは、文士として ^{著述の上} 都合の好い事だ。

No.

25 列

は有るまじい。

そのころ又 八日間世界一周

行 海空旅行といつれり井上勤の譯した

りのり愛讀した。

或日おまが自分の向る 然う遊んでばかり

るには仕様が無いが、一体貴様は何を成る。

と問ひ掛けた。

軍人志願を強いられた 柵本なる頃の幼年

校の入学願ひまで出されたのが、到着健康が

それと適せぬりを見切ると、其方は叔父の諱

A 10 20 曹山 三河屋紙店製

突然さ。

めてるんが、自分は此時、昔年の門に入

りて、画工に成りたいといふ事を切出した。

洋画で習ふといふ事を、おまが好いが。

浮世画師に成り、あんで、怪しむと、と大目

玉を食つて及ぶし。(美術思想あんで、時代

の一般に無かつた。学生中の繪ぶり畫けた

やうな者は稀に無かつた。有つて日ソレ

は文人畫位に、あんで有つた。又軟文學の研ゆ者

あんで、~~あんで~~ 漢文漢詩は多く讀

る者が有つた。

見

で井上氏の顔の印象が深く、後年新聞記者團
 と旅行した時、名乗り合つた事がある。こ
 の叔父と云ふ人が生死不明で、遺言状は依る 遺言状は依る 遺言状は依る
 道で発見された事は、当時の新聞にある。
 坪内先生の書生執筆の頃、以頃初めて世に
 出たのが、それは半紙摺りで、分冊で有つた。
 其一部を自分は讀んだが、編者 編者 編者
 当時、文学士と云つた、今の博士より、
 っと偉く思はれてゐた。その学者が小説、如き 如き 如き
 小説の筆も決まらなかつたので、先づ 先づ 先づ
 人は、

No.

だ、と叔父の偉く心着いた。神田淡路
 町の共立学校へ、英語を習ひ、通はせられた。
 そつと成つた。其時の校長が今の政治家の高
 橋是清さんで有つた。
 其時の同級生は井上巒十庵、櫻井熊右郎の
 二氏が有つたのが、後、再會して分つた。井上
 氏の叔父さんが、結核の患で、結核 結核 結核
 井上氏へ朱書の「ハガキが来たので、いよいよ
 暴動が起る」といふ事を告知したといふ話と、
 其友人、友人 友人 友人
 を立聞きしたので、それ

A 10 20 青山三河屋紙店製

つれ。模倣性もあつたが青年期の自分が、春の
 風流の習作を残すは、馬琴擬ひ種多擬ひの
 暗代抄のやを書いてあつたので分るが。
 純粋な不見少年。それは併し不思議な友愛
 が出来たといふ。村松町は商家ばかりといふので、
 同年配の者は大概小僧で有つた。甘藷係で有
 つたかもし知れぬ。
 今のやうな不見少年の横行する格好場所が
 少く、又行通が不便な格好で有つた為、
 学校を怠りて遊ぶ多くとし、神田めがぬ

No.

いん。けれども、定りし緻密づくめの堅苦しい
 もので有つた。作者は小説が書けるも
 り。然るに考へて見れば、意外な人情
 が書き分けられて有つて、シカモ文体といひ、材
 料といひ、善悪もいふか、つね新形式といふ
 忽ち世上の大評判と成つたので有つた。
 白然する自分、小説を何処までも七五
 調の旧系統を追う物といふのは、私目とい
 ふ風を考へてゐる、春の家おぼろの著書に對
 しては、反感を抱いたので、全部通讀はしなかつた

A 10 20 青山 三河屋書店製

29見

讀書界を驚かし、その圓朝の人情味の速
 記を新聞に載せ始められた。やま新聞で
 こゝろは條野採菊山人の（？）小説を
 書いた。
 改進新聞は須藤南翠が、松平外記の如
 傷を書いて大当りで有つた。
 胡蝶園若菜、新霞園柳香、柳條亭繁多、柳
 日亭華多といふ名を以て時代を於て記憶した。
 大阪の日守田川文海が殆ど一人舞臺の歌が
 有つた。
 朝王二筆松山、孝子の仇討きと

佐道布

外史

No.

の廣小路、秘葉の原、佐竹の原、藤巻の原位
 の者で有つた。新聞の芝居の立見廻り（？）他思ひ
 今自分の古い記録を見ると、劇端の名は、新富
 齋、千歳齋、市村齋（後の明治齋）、猿若町時代、中村齋（鳥
 越）中島齋（攝津町）、桐齋（四谷津守）、春
 本齋（今の本郷齋）、青齋（本所録町）及び柳
 盛、社音、朝日、喜昇、大和、盛元、開盛、
 浄瑠璃、輝晃、宝来の（？）有つた。
 話が前後するが、若林珪義の速記で、圓朝の
 怪談牡丹燈籠が出版されたのり、當時の

A 10 20 青山三河屋紙店製

30見

大阪朝日新聞で買った小説は大概単行
本として出て居る。(某紙の印刷した小説)

本) 同新聞は文海の小説と芦廣? 若国? の挿
絵で賣ると云はれて居る。

東海散史の佳人之奇遇(十八年の出版
で有る) 自分は未だ読まずに居る。

却説、自分は鶴り急げ者にとりふり
叔父と種々心酔して、その家屋の事情も有

りなで、郷里の祖母と母とが女中を連れ
て上京する事と成る。 濱町氷蔵(貯)上庫の横町

A 10 20 青山三河屋紙店製

よおのの家を求めて居る。 清元延壽方丈の
住んが家とりふり五室有るが、それで二
百円下、其時暗て居ると云はれる。

五月下、其時暗て居ると云はれる。
祖母は、~~五月、其時暗て居ると云はれる。~~
五月、其時暗て居ると云はれる。

唯一の金存者)の如く隠れて居る。 高野山林復讐(喜劇)
路で有るが、依然として急げつづけるので、
今川小

幸い自分が京都の岩垣月洲先生の塾で一緒で
有る杉浦兄弟(長兄楠陰正臣、弟が梅窓心

生、弟が梅窓心)

重剛先生)が小る川で鉄を開いてる。

女釣へ ~~連行~~ ウンと鍛へ直して世に成

つれが有つん。

妻が楠陰先生の方は閉がて、梅窓先生の方

は合して有つん、自分は三百頃の桶好鉄工

の方は入る ~~許さん~~ 正は自分が一轉化す。

時機が来んので有つん。 ~~斯うな~~ 始末は了へぬ台座者

杉浦の鉄を入つて如何 ~~いふ風~~ 変つんか。

~~杉浦の鉄~~



